

加古川地域の未来について話をしよう！
— 「熟議 2013 in 兵庫大学」 報告書 —

2014年3月

兵庫大学・兵庫大学短期大学部

目次

第1章	はじめに	1
	「熟議 2013 in 兵庫大学」報告書の刊行にあたって	
第2章	「熟議 2013 in 兵庫大学」実施計画について	3
	～テーマの設定と内容～	
第3章	加古川地域と個々の暮らしを考える	9
	～熟慮の成果～	
第4章	世代を超えた熟議	31
	～議論の成果～	
第5章	熟議への意識と地域への認識の変化	45
第6章	熟議に参加した学生と高校生	69
	～変化と成長～	
第7章	おわりに	89
資料編		
	「熟議 2013 in 兵庫大学」開催結果	95
	事前配付資料	97
	事後配付資料	110

第1章 はじめに

「熟議 2013 in 兵庫大学」報告書の刊行にあたって

兵庫大学・兵庫大学短期大学部 学長 三浦 隆則

本学は、地域に根ざす大学としての、そして「地域の生涯学習機会の拠点たる大学」としての立ち位置から、さまざまな活動と情報発信を行ってきました。公開講座の開催、地元自治体との連携、産官学連携、高齢者大学「兵庫県いなみの学園」との連携協定、等であります。

行政レベルでは、文部科学省は、平成24年6月の「大学改革実行プラン」において、「地域再生の核となる大学づくり COC (Center of Community) 構想の推進」を打ち出しました。本学においても、東播磨地域にある唯一の大学であることの自覚・役割を認識し、真の意味で COC たるべく努力しています。また、平成26年4月には、設置を検討しておりました「兵庫大学 エクステンション・カレッジ」を開設いたします。これまでの継承発展であるとともに、新たな形での地域貢献を推進してまいります。

さて、昨年度、地域連携の一つとして、文部科学省との共催で「熟議 2012 in 兵庫大学」を開催しました。熟議について、「大学は、地域や社会の知の拠点として、住民の生涯学習や多種多様な主体の行動を支えると同時に、地域や社会の課題を共に解決し、その活性化や新たな価値の創造への積極的な貢献が求められている」と記されています。熟議は、「熟慮」して「議論」するということであり、事前にテーマについて知識を得て、考えて、当日の議論に加わることとなります。

熟議のもう1つの趣旨に「異なる立場の者が一体となって課題解決の方法等を考える場づくりとして、また、学生の学習の場としても有効である」と記されており、異なる立場の者が集い、熟議することの意義が示されています。今年度は、より多くの若い世代の参加を増やすこととし、地元の高校生の参加を要請し、大学生には、ファシリテーターとしてもワークショップのメンバーとしても参加していただくこととしました。おとな世代とのコラボレーションの中から、生徒、学生の学び、成長を期待する形にしました。

昨年度の熟議のテーマは、「地域における生涯学習社会の構築と大学・自治体の役割」であり、生涯学習社会の構築についての熟議としました。その実践を経て、熟議プロジェクトチームを再構成（昨年度のメンバーに2名追加）し、実施に向けてのスタートを切りました。今年度は、若い世代にも多く参加していただきますので、若い世代が「熟慮」して「議論」しやすいテーマを練り、「加古川地域の未来について話をしよう！」としました。

熟議の成果として、「地域や社会の課題の解決」、「その活性化や新たな価値の創造」に貢献したか否かは、本報告書からお読み取りいただくこととし、本熟議に参加していただいたみなさま、ファシリテーター

ターとしての事前研修に参加いただいた学生諸君、熟議実施までの準備に力を発揮していただいた熟議プロジェクトチームならびに関係教職員のみなさま、本報告書作成に尽力いただいた熟議プロジェクトチームのみなさまに心から感謝申し上げます。

第2章「熟議 2013 in 兵庫大学」実施計画について

～テーマの設定と内容～

1. 熟議の継続とテーマ

2012年7月1日に実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」は生涯学習をテーマとして実施された。このとき熟議手法を確立し、さらなる普及を推進する必要性が指摘された。また地域において、高校生を含めた多様な世代が一つのテーブルで話し合う意義も認められた。こうした経緯から、本学では 2013年度においても熟議を継続すること、そして熟議のテーマとしては、「地域」を中心とすることが確認された。これを踏まえ、「熟議 2013 in 兵庫大学」が始動することになったのである。

「熟議 2013 in 兵庫大学」においては、下記の通りのプロジェクトメンバーにより、企画・運営が行われた。

田端 和彦	社会福祉学科 教授
吉原 恵子	社会福祉学科 教授
北島 律之	社会福祉学科 教授
森下 博	経済情報学科 准教授
木下 幸文	健康システム学科 准教授
久井 志保	看護学科 講師
井上 朋子	短期大学部保育科 講師
小林 洋司	短期大学部保育科 講師
副島 義憲	学長室長
柏村 裕美	学長室員

「熟議 2013 in 兵庫大学」の熟議プロジェクトチームでは、昨年度同様熟議のテーマの選定、実施に係る具体的な課題の導出などを行う。下記のように8回のミーティングを重ねた。

熟議のテーマであるが、兵庫大学は地域の生涯学習の拠点となるという使命を掲げており、昨年度の「熟議 2012 in 兵庫大学」では、生涯学習を取り上げた。さらにそれを発展させること、あるいは異なるテーマを考えることが課題となった。特に若年者の場合、関わることの少ない「生涯学習」には十分な関心を持つことができない、との点が指摘され、多くの方が参加しやすい、そして考えるきっかけとなる「地域」をテーマとして掲げることとした。特に、自治体の総合計画等で繰り返し表出される、「地

域活性化」に本学もまた寄与することの重要性から、「地域活性化のための熟議」と位置付けることになった。これは熟議が、地域政策にも直接寄与し得る機会となることを示す機会ともなる。

その上で、単年度ではなく、複数年度として3年間で、政策提言など結論を導き出す方法が提案され、3年計画の熟議がスタートすることとなった。地域において具体的に考え、話し合うべき課題を探るため、地域（加古川市、高砂市、稲美町、播磨町の二市二町）の総合計画等を参考に検討をしたが、課題を解決する以前に、住民が課題をどのように認識をしているのか、という市民の自立を促すことの重要性もあり、まずはニーズを引き出し、その上で課題を選定することが望ましいと考えられた。まずは話し合うこと、そしてそれが過去を払しょくするのではなく、若者たちが参加しやすい未来を向いての話し合いの場にしたい、との結果、「熟議2013 in 兵庫大学」のテーマを「加古川（地域）の未来について話をしよう！～世代を超えた熟議～」と定めたのである。

会議名	日程	内容
プロジェクトミーティング①	平成25年 5月1日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・熟議の目的を「地域活性化のための熟議」と位置付ける ・3年計画での推進を考える。
プロジェクトミーティング②	6月17日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・3年計画の1年目はニーズの把握機会とする。 ・具体課題の設定は、地域を学ぶ機会を若年者に提供すること、また地域への還元を重視する。 ・2市2町が掲げる課題に沿ったテーマ。
プロジェクトミーティング③	7月29日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・兵庫大学の推進するCOC（Center of Community）との関係について。
プロジェクトミーティング④	9月2日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマの決定。「加古川（地域）の未来について話をしよう！～世代を超えた熟議～」 ・参加者の構成見込みの策定。
プロジェクトミーティング⑤	10月7日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者事前配付資料についての検討。 ①基礎統計的な資料の配付 ②「強み」「弱み」が見えてくる質問方法を取り入れた記述 ③高校生・大学生に対応し得る「自己認識シート」 ④熟議手法を問うアンケート
プロジェクトミーティング⑥	11月19日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・当日の進行についての確認。 ・ファシリテーター養成講座について。
プロジェクトミーティング⑦	12月10日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・「熟議2013 in 兵庫大学」振り返り。 ・報告書内容、各担当者の検討。報告書は3年計画の中間報告的意味を持つため、次年度への課題を意識した内容とする。
プロジェクトミーティング⑧	平成26年 2月17日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書の追加項目の確認。 ・来年度の実施について。

2. 3年計画となる熟議

「地域活性化のための熟議」を基軸に3年計画で進めるにあたり、地域の定義、活性化の意義などを明らかにする必要がある。まず地域については、兵庫大学の存する加古川市を中心に、東播磨沿岸地域とし、具体的には上述の二市二町として、それを加古川地域と称する。次に、活性化の意義であるが、

通常、活性化は経済の活性化として捉えられるが、ここでは昨年度の熟議での成果も踏まえ、若年者の社会参画や地域での学ぶ機会の提供など、地域の資源や人材の活用なども含めることとする。このことは、本学の専門職の人材養成とも密接に関連することでもある。

その上で、前述のように、最終的には地域への政策の提言を行うなど、地域に対して熟議の成果を政策に反映することができるような3年間の、計画が必要になる。そこでは、第一に課題の導出、次いで課題に対する解決策を探り、そして提言としてまとめる、というプロセスを要する。政策への反映を視野に入れてのテーマの選定が重要となる。

そのため、1年目は、ニーズを把握する機会として、参加者の年齢や所属が混在するグループ分けを行い、比較的規模の大きい熟議を開催する。2年目はニーズを踏まえ、テーマを絞り、より小さなグループで、場合によっては高校生のみ、高齢者のみという年齢によるグループ分けを行っての、詳細な議論の場を設定する。そして3年目は、同様にテーマを絞り議論を深め、地域づくりの専門家なども参加する場を設けて、具体的な提言を取りまとめる。それらについて加古川市をはじめとする自治体に提案をする。そのためには自治体へのチャンネルを創ることも必要になる。

さて、こうした政策提言のための3年間を要すると同時に、この3年間では、熟議による合意形成の手法を地域に根付かせることも必要となる。これらは地域における自主的なガバナンスの確立とも関連する。

政権に返り咲いた自由民主党は、その綱領に、「自助自立する個人を尊重し、その条件を整えるとともに、共助・公助する仕組みを充実する」ことを謳う。重要な点は、自助を中心としつつ、共助と公助を並列に扱っている点である。つまり、新自由主義的な社会保障の考え方において、自らを助け、できなければ共助、それでもできないと公助という順をも突き崩す考え方である。ここには共助と公助の区分のむつかしさがある。地域において、様々な活動がなされる。その多くは自治体が補助を行ったり、協働をするなど、自治体も関わる事業であり、実質の公助がなされている。しかしながら、地域における活動では、財政難もあり自治体の役割が縮小される一方で、理念に基づくNPOと地縁組織との協働が模索されるなど、共助が重視される中で公助との境界が明確ではなくなりつつある。公助の場合、首長の選挙に基づく行政の、また議員の選挙に基づく財政のガバナンスが作用するが、共助においては明確なガバナンスが存しない。

ガバナンスの一つに意思決定がある。地域における熟議は、すなわち個々の政策とそれを実施する裏づけたる予算を定める合意形成の手法となりうる。例えば、イギリスではコミュニティの自治組織として、パリッシュがあるが、住民総会や無給の代議員によるパリッシュミーティングなど意思決定の仕組みがある。日本では、地方自治法の定めにより、主に合併などでの弊害を避けるために地域自治区の設定が認められ、そこでは地域協議会が意思決定に関わるとされる¹。しかし地域自治区の数は限定的であり、さらに自治会など、より小規模なコミュニティレベルでの自治組織を踏まえるとそれらの意思決定

¹ 総務省「地域自治区制度について」

の仕組みは多様であり、熟議を民主的な合意形成の仕組みとして位置づけることができるのではないかと。

ところで、ローカルガバナンスを巡る議論とは別に、合意形成の手法は、特に高校生を考えた場合、生徒会役員選挙など民主主義の基本たる選挙や多数決の原理について、実地で学ぶ機会はあるが、クラスルームなどでの協議はあっても、時間をかけた話し合いによつての合意形成を学校教育の現場だけでは学ぶことも、またそのために必要な数々の能力を育むこともむずかしい。高校生だけでの熟議を行う背景には、熟議手法の高校生への定着を目指す活動の一環ともなる。また最終年度には、地域の高等学校側に対し、教育効果を踏まえてのカリキュラムや学びのプロセスについての提案などを行う。これもまた熟議の「目に見える」成果になると考えられる。

3. 「熟議 2013 in 兵庫大学」計画の詳細

「熟議 2013 in 兵庫大学」は熟慮と議論による熟議という手法を市民と一緒に共有し、地域の課題である「地域活性化」をテーマとして議論を行うことで、将来の地域の方向性を定め種々の課題の解決に資する最初のステップとすることを目的とした。すなわち地域における住民のニーズの導出である。

また学術的にも、昨年度同様に、討議型世論調査の手法を一部応用し、議論の前後でどのように意見が変わったのかを検証したい。討議型世論調査では参加者に議論の前に十分な情報を与えるが、昨年度実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」ではこの点を踏まえ、5段階での構成を基本とする、独自の熟議手法を開発した。「熟議 2013 in 兵庫大学」でもこの手法をそのまま応用することとした。【p98 参照】

各段階の詳細を示す。

まず事前に学習して認識を持つことが、「熟慮の段階」である。ここでは、対象とする地域の定義、その主要統計など最小限の基礎的な資料を送付し、参加者がそれを読むことから始まる。プロジェクトチームでは、当初、当日には参加者により地域に係る議論がスムーズに行われるよう、この事前の「熟慮の段階」では地域のことをじっくり考え、自身の価値観から地域を見定めることが必要であると考えた。

そこで、まず、参加者は地域と関わる場合の自分の価値観を見出すために、資料 A として下記を問うた。

- ①あなたは 20 年後どんな生活を送っていたいですか？
- ②あなたは普段こういった時に「幸せ」を感じますか？
- ③あなたがお住まいの「ふるさと」自慢をしてください。
- ④あなたは将来どんな「ふるさと」にしたいですか。

参加者は未来の理想から自分を眺める事で、考え方を客観視する手法で、まず 20 年後の自分自身に係る理想を思い、そのようになるための基礎となる今の幸福感を考える。同様に、今度は地域の「今」を考え、その上で未来の理想を描く。未来像には、自分自身の幸福感や未来への理想が反映される。

そして、資料 B として下記を問うた。

- あなたが思う加古川地域の「強み」を記述して下さい。
- あなたが思う加古川地域の「弱み」を記述して下さい。

参加者は自分の地域観を客観視した上で、加古川地域の「強み」と「弱み」を冷静に判断することができるであろう。この資料 A、資料 B の回答についての分析は第 3 章に示す。

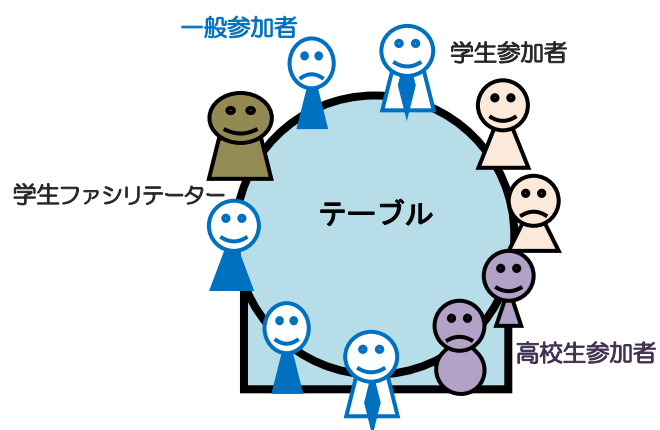
次が「議論の段階」であり、ここでは名前以外は明らかにせず、つまり立場が平等として、会場にて、熟慮の結果として持つ認識を出し合い、議論をする。

1つのテーブルには、8人程の参加者がつき、ここに学生のファシリテーターと職員による記録係が配置される。テーブルは指定されており、議論の進行は、ファシリテーターが行う。

「共有の段階」は、議論で得られた結論や議論の内容を共有するもので、これは議論の後、結論を参加者が報告することで行われる。複数あるテーブルで、どのような議論が交わされたのか、あるいは結論は何かを参加者が共有する。討議型世論調査の場合のように、無作為抽出で参加者を選んだのではなく、テーマに惹かれ希望する人が参加をしており、参加者には、地方公務員など直接地域とも関わる業務に就く人や間接的にそれを支える人もおり、共有された熟議の内容を持ち帰り、今後の地域活動に活かすことができる。

「振り返りの段階」は、議論により参加者一人一人の心の中で、生涯学習への認識はどのように変化したのかを確認するとともに、仲間づくりと自分の成長を確認する。

最後は、「活動の段階」。今回開催された「熟議 2013 in 兵庫大学」で出会った仲間とともに、その成果を踏まえ今後の地域での活動を行う。それぞれの立場で、それぞれの考え方をもち、共に活動していくことが、熟議の最大の目標でもあり、また成果である。



(田端和彦)

第3章 加古川地域と個々の暮らしを考える

～熟慮の成果～

1. 議論のためのウォーミングアップ

熟慮はグループで議論をする前に、まず個人で“熟慮”するところから始まる。簡単に述べれば頭のウォーミングアップである。スポーツをする際のウォーミングアップの重要性は今さら述べる必要はないが、物を考える際にもウォーミングアップは同じように重要である。

近年の認知心理学や脳科学などの認知科学といわれる分野では、私たちがものを考える際に活動する心のステージをワーキングメモリと呼んでいる。ワーキングメモリには目や耳などの感覚器から入力された情報や、すでに頭の中で蓄積された経験や知識といった記憶が呼び込まれ、さまざまな検討が加えられる場所だと考えられる。すなわち、議論において各個人が述べるべきことを述べるためには、ワーキングメモリが十分に活動していなければならない。そのため前もって、本やインターネットなど必要な資料を調べて情報を入力し、これまでの経験や知識を引っ張り出し、ワーキングメモリを準備状態にしておくウォーミングアップは必要なのである。

ここでは、前半は「個人的な幸せとは何か?」「20年後の自分はどうなっているか?」「自分のふるさとの自慢は何か?」「自分のふるさとの将来をどうしたいか?」といった個人の価値観や自分のふるさと意識について問う内容になっている。最初に自分自身のことからウォーミングアップを始めることになり、参加者は比較的回答しやすいものと思われる。後半は、本熟慮での議論のテーマでもある加古川地域の強みと弱みを直接的にたずねている。個人の価値観やふるさと意識を参照しつつ、限定された加古川といった地域の特徴について考えることが求められる。ここで回答された強みや弱みは、グループの議論を展開する上での最初の一步になるものである。事前の熟慮の段階でのワーキングメモリの状態が、グループでの議論のワーキングメモリに引き継がれることになる。

ワーキングメモリはあくまでも個人の知的活動を担うステージであるが、各個人のワーキングメモリが議論の中で十分に活性化することで、グループ全体が大きなワーキングメモリとなることが想像できる。そうなれば情報量や処理能力が個人単位よりも飛躍的にアップし、個人では導くことができなかつた答えが生まれることが期待できる。その成果を生み出すことが熟慮の大きな意味と考えられる。

～ 資料A 事前熟慮メモ (1) 【p102 参照】 から～

(1) あなたは 20 年後どんな生活を送ってみたいですか？

【高校生】からの代表的回答

「クリエイティブな日々を過ごす」「幸せな生活をおくる」「ストレスがない」などの概括的なもの、「開発エンジニア」「海外での仕事」「学芸員職」「公務員」などの職業に関するもの、「結婚」「幸せな家庭」「マイホーム」などの家庭に関するもの、「地域の人たちと協力」「仲のいい人が近くにいる」などの交流に関するものに分けられる

【大学生】からの代表的回答

「有意義な生活」「健康で幸せな生活」「笑顔で生活」などの概括的なもの、「管理栄養士」「養護教諭」などの職業に関するもの、「温かい家庭」「結婚して子供がいる」などの家庭に関するもの、「近所や地域の方と仲良く過ごせる」「友達関係を維持」などの交流に関するもの、「安全で安心できる生活」「子どもを安心して育てられる」などの安全性に関するものに分けられる。

【行政関係者】からの代表的回答

「のんびりと生活を送る」「趣味ざんまい」「時間の流れがゆっくりとしていて、平和な暮らし」などのゆったりとした暮らしに関するもの、「様々な人との積極的な交流」「家族と元気に暮らしたい」などの交流に関するもの、「些細なことに幸せを感じられる」「老後の心配をすることなく生活したい」などのその時々を感じ方に関するものに分けられる。

【民間・市民活動／高齢者大学生からの代表的回答】

「健康でしっかり、元気に過ごしている」「死ぬまで勉強できる幸せと社会と関わりのある生活」「読書、カラオケ、ゴルフ、旅行などの趣味を続ける」などの積極的な活動に関するもの、「静かな環境で平穏な生活」「できるだけ、家族、世間に迷惑をかけないように自立したい」「家族と和気あいあい」などの穏やかな暮らしに関するもの、「今の年齢から 20 年後は考えられない」「東京オリンピックまでは頑張りたい」「若い世代が活躍できる 20 年後」といった 20 年後を考えられないといった意見や次世代を応援するものに分けられる。

高校生と大学生は類似した傾向であり、漠然としたイメージとしての希望から、就職、家庭、地域との交流といったものが挙げられていた。この年代から既に地域への意識を強く持っている生徒や大学生がいる。行政関係者は現役世代であり、現在の忙しさからか、ゆったりとした生活に憧れをもつ者が多い。一方、その時にどのように感じるかといった、状況の受け止め方への関心がみられる。一般参加者

は比較的高齢であり、健康かつ元気で活動したいといった思いが強いようである。なかには、20年後は自分にとっては遠い未来であり、想像できないといった意見も見られた。

(2) あなたは普段どういったときに「幸せ」を感じますか？

【高校生】からの代表的回答

「おいしいものを食べたとき、ねるとき」「わからないものがわかったとき」「趣味に熱中しているとき」「周りの人との関係がうまくいっているとき」「友達といるとき」「家族全員でご飯を食べているとき」「友達・彼氏といるとき」「結果が出せたとき」「人と協力して何かをするとき」「自然と触れ合っているとき」「季節ごとの花や虫を見つけた時」

【大学生】からの代表的回答

「ご飯、あったかいお風呂、友達、家族」「ゆっくり寝られるとき」「バイトの給料が入った時」「自分のミスカバーしてくれる人がいるとき」「助言をもらうとき」「家に帰った時おかえりと迎えてくれる時」「好きな人と話をしているとき」「友達・彼氏といるとき」「近所の溝や公園を住民の方が掃除してくださる姿を見たとき」「お礼を言われたとき」「悲惨なニュースを見たとき」

【行政関係者】からの代表的回答

「布団に入る時」「おいしいものを食べたとき」「一息ついているとき」「自分の時間をすごしているとき」「家族そろって夕食をとっているとき」「家族と一緒にいるとき」「子どもの笑顔を見たとき」「人と幸せをわかちあうとき」「誰かに助けてもらった時」「何かをやり遂げたとき」「ひとのために何かできたとき」「幸せと言えるまでは達していない」「楽しさと幸せは違い、幸せは相対的なものであるのだから気づく」

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

「三度三度の食事がおいしい」「のんびりする時」「クラシックを聴く」「自分の好きなことができているとき」「自分の時間をすごしているとき」「たまの旅行」「日々変わらぬ生活が送れたとき」「目標を達成できたとき」「家族と一緒にいるとき」「日常的な会話」「グループでの活動で問題を乗り越え、メンバーが成果を感じたとき」「共感してひとりではないと感じるとき」「ボランティアで成果を出し、次のことを計画するとき」「人の役にたてたとき」「健康体に感謝できる時」「自分自身の人生観を良くするも悪くするも自分次第」「幸せは自分なりに感じる時」

年代によって大きな違いはないと思われる。美味しいものを食べたり、ゆっくり寝たりといった基本的欲求が満たされたときや、趣味などの自分の世界に没頭しているとき、家族や友人と触れ合っているとき、目標を達成したとき、人の役に立てたときなどが共通していた。若い世代では、恋人といるとき

に幸せを感じるという回答がいくらか見られた。年代が上がると「幸せ」とはそもそも何かという疑問や、「幸せ」についての自らの心構えが大切であるといった回答も寄せられた。一人からであったが、「悲惨なニュースを見たとき」という回答は印象深い。自分の幸せを他者との比較から気づくことも多いと思われる。

(3) あなたがお住まいの「ふるさと」自慢をしてください。

【高校生】からの代表的回答

「田や畑が多い」「暖かく天候に恵まれている」「景色が良い」「工業が昔からさかん」「自然と都会がある」「病院がたくさんある」「新快速がとまる」「交通が便利」「住みやすい」「将棋」「イベント」「スポーツが盛ん」「かつめし」「歴史的なものがある」「来年の大河ドラマ」「老人や障害を持つ方にやさしい」「人があたたかい」「近所づきあいがよい」「公民館が多い」「危険な犯罪や災害が少ない」

【大学生】からの代表的回答

「海・山がある」「ため池が多い」「星がきれい」「自然が豊か」「空気がキレイ」「大きな企業がある」「交通の便が良い」「新快速がとまる」「商店街や駅が活性化している」「ご当地グルメ」「日本のへそ」「姫路城」「書写山がある」「地元にある神社を中心にいろいろな行事がある」「レガッタができる」「季節ごとの果物が楽しめる」「高齢者が元気」「福祉が充実」「地域のつながりが強い」「明るく、元気がある」

【行政関係者】からの代表的回答

「海や山や川の自然が豊か」「のどかな田園風景」「田舎でもなく都会でもない」「町域がコンパクト」「神戸や大阪へ1時間以内に行ける」「利便性(商業施設、交通)」「住みやすさ」「特徴的なものはないが、すみやすい」「食べ物」「かつめし」「志方牛」「にくてん」「あなご」「歴史的遺産」「鶴林寺」「ヤマトタケル伝説」「大中遺跡」「文化や伝統の街並みが美しい」「祭りが盛ん」「気候が穏やか」「地元に着愛を持つ人が多い」「大きな災害がない」

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

「山や川」「比較的自然が残されている」「ため池が日本一」「近くに大きなショッピングセンター」「交通の便(姫路・神戸・大阪へ近い)」「自然がある一方、利便性もあり、生活環境が良い」「静かな町で親切」「長閑な町」「加古川は、発展しているようでありあまり変わっていない」「食が豊富で食べ物が美味しい」「伝統」「踊っこまつり」「プロ棋士が5名育っている」「加古川薪能」「謡曲高砂の発祥の地」「美濃部親子文庫」「考古学博物館」「歴史的ロマン」「ヤマトタケルの生誕地」「鶴林寺や教信寺」「古代に大きな駅家があった」「町内の活動に皆が協力的」「大学がある」「マラソン」

年代によって大きな違いはないと思われる。参加者が住んでいる地域にはばらつきがあり、特定の地域が言及されているわけではないが、自然があること、利便性が高いこと、自然と都会の共存による住みよさ、食べ物、歴史的な建造物や人、地域の伝統、人々の元気さや優しさなどを挙げた人が多い。一方で、年代が上がるほど、伝統や歴史的文化財に対してより具体的な記述が多く見られ、地元についての知識が深くなっていることがうかがえる。

(4) あなたは将来どんな「ふるさと」にしたいですか。

【高校生】からの代表的回答

「自然をそのまま残したい」「景観に配慮したふるさと」「人が集まりやすく、産業が盛んで、豊かなふるさと」「今を変えたくない」「たくさんの人と関わることができる」「人の温かさを残しつつグローバルな街」「祭りをもっと活発に」「活気がある」「他地域との交流が良好」「笑顔が多い明るいところ」「若者が多い」「お年寄りも小さな子どもも暮らしやすい場所」「公園でもっと自由に遊べるような街」「安全で安心できる」「帰ってきたとき、懐かしい、ここがいいと思える場所」「みんなが幸せ」

【大学生】からの代表的回答

「自然をあるべき姿で」「海や山 自然を保つ」「緑豊かで空気が美味しい」「働く場所が増える」「経済的に豊か」「車移動が便利」「住みやすい」「地域のつながりがある」「明るく、安心してらせる」「観光地ができて有名な」「地元の特産品を全国に発信できる」「きれいな町」「お年寄りがすごしやすい」「福祉だけでなく、医療がもっと充実している町」「戻ってきたいと思える町」「住んでいるみんなが幸せといえるふるさと」

【行政関係者】からの代表的回答

「豊かな自然が維持され、良好な人付き合い」「すばらしい田園環境を残しつつ、いきいき、なごやか」「都市化はのぞまないが、バランスの良い人口構成」「誰が住んでも住みやすい」「安全、安心な町」「より安全で、より美しい」「地域のみんなで支え合っ対処できる街」「今よりも地域コミュニティが充実」「人口が減少していくなか、今までと変わらず活気のある住みよいまち」「子育てをする世代が住みやすい」「老人や若者が希望をもてるふるさと」

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

「自然と共生し、人のぬくもりが感じられる場所」「働く場所があり、自然もある」「若者が自分らしく働き続ける物づくりの会社ができたらよい」「南北方向の道路の充実」「適当に便利である今の街の継続」「良好なコミュニケーション」「自分たちができることには参加していこうという意志」「コミュニケーションがよりよくなる」「明るくてお互いに支え合う孤独な人がいない町」「一人暮らしの人

たちがより集う場所で、誰もが笑顔で生活できる」「穏やかに過ごせる」「公害がない」「子どもたちが元気で明るく安心安全な町」「高齢者が安心して生活していける」「愛着を感じるふるさと」「自己実現ができる町」

年代によって大きな違いはないと思われる。自然と利便性が共存、活気があり安全、地域におけるコミュニケーションの存在、子どもや高齢者の住みやすさなどが重視されている。そして、そのようなふるさとに、愛着を感じ戻りたいと思えることも大切である。基本として現状を維持しながら、さらに住みよい街にしていきたいという考え方が見られる。新しい何かを創造していくような大きな変化は、どの世代もあまり求めていないようである。

(北島律之)

2. 加古川地域の「強み」と「弱み」

～資料B 事前熟慮メモ(2)【p104参照】から～

「強み」(Strength)、「弱み」(Weakness)は、地域づくりや企業の戦略を考えるための効果的な手法であるSWOT分析の要素として用いられることもあり、地域に関わるワークショップを行う場合などに「強み」「弱み」を議論することは比較的多く行われる。地域についての特徴を明確にすることができるが、反面、参加者の価値判断により、意見が分かれる可能性があることに注意が必要となる。例えば、「自然が豊か」はある参加者には「強み」と映っても、他の参加者には「未開地が多い」という「弱み」になる可能性がある。専門家が行うSWOT分析は、機会(Opportunity)と脅威(Threat)の中で、個々の企業や地域の「強み」を活かし、「弱み」を最小化するための戦略を考え提示する手法であるが、同様に「強み」を活かし、「弱み」を最小化することを多数の参加者のある議論の場で行うためには、その認識の調整に時間を要することになる。「熟議2013 in 兵庫大学」は、兵庫大学の考える熟議手法、つまり熟慮段階が議論段階の前にあることで、自分の考えをまとめる時間を持つことができ、自分の考える地域の「強み」「弱み」を議論段階でも端的に説明すること、つまり認識の調整の時間を最小に抑えることができる。

こうした、議論を進めるにあたり考えを整理することを要する「強み」「弱み」ではあるが、先述のように同じ事象であっても立場により、「強み」と感じるか、「弱み」と認識するかには違いがある。また、全ての人が「強み」や「弱み」と了解する内容は何か。こうした分析は、いわば住民や関係者の目を通して加古川地域の姿を浮き彫りにする方法でもある。

具体的には、「強み」「弱み」の内容についての特徴を明らかにし、また回答者の属性との関係などについても触れる。さらに、それを踏まえ、地域要素に係る視点を提示する。この視点は今後の分析に役

立てるほか、地域の将来や課題を考える上での基点を提供すると考えている。

(1) 全般的な傾向

まず、全般的な傾向を把握するために、「強み」「弱み」の内容を、回答者属性で取りまとめたものが、【表 3-2-1】【表 3-2-2】である。

加古川地域の「強み」について、全ての属性で共通して挙げられていた項目は、「自然が豊かである」「生活しやすい（ベッドタウン）」「利便性がよい」「歴史がある」である。また、「産業が盛ん（働く場が多い）」「地域のつながりが強い」「スポーツ」「施設の充実」などに関する項目もあげられている。それぞれの属性、つまり行政関係者、民間・市民活動／高齢者大学生、高校生、大学生で比較すると、最も多様な意見が見られ、地域を多面的に捉えていたと思われるのは、高校生であることがわかる。

次に、加古川地域の「弱み」であるが、共通する内容は、「(地域に) 特徴がない」「商業（産業）の衰退」、また「交通」「人口や担い手の過疎化」である。「交通」に関しては、南北での利便性の悪さや交通マナーの悪さ、交通事故の多さが共通する内容である。

また「強み」として挙げられていた内容と同じ内容が、「弱み」としても挙げられている。例えば、人口については、人口が多いことが「強み」では挙げられていたが、「弱み」では逆に人口が少ないことが挙げられる。また、利便性についても、利便性のよいことが「強み」で挙げられていたが、「弱み」では交通が不便な点もある。人口集積や利便性の基準が回答者により異なることもあるが、同じ要素が見方によって、あるいは立場により、「強み」「弱み」に分かれることもある。

さて、「強み」同様に、「弱み」でも、最も多様な意見が出ていたのは高校生であるが、民間・市民活動／高齢者大学生も「弱み」が多数挙げられているところを見ると、危機感の表れなのかもしれない。

ところで、行政関係者からはなかった内容で、他の属性から、「弱み」として、治水整備の遅れ、観光資源が少ない、ことが挙げられているが、この点は行政施策とも関連するだけに、市民と行政の意識のずれを修復する必要があるだろう。

行政関係者	民間・市民活動／高齢者大学生	高校生	大学生
水辺空間 気候がよい 自然に恵まれている 平地が広がっている ベッドタウン／利便性がよい 生活しやすい 交通の便がよい スポーツが盛ん 文化環境が充実 工場と資源の調和 映画のロケ地 歴史 ゆるキャラが有名 地域のつながり	自然 人口規模 生活しやすい環境 ベッドタウン／利便性がよい 産業 医療福祉施設の充実 教育環境の充実 スポーツ 歴史 地元愛 市民力 地元のつながり 将来性	自然が豊か 加古川 河川敷の有効利用 水が豊か 人口が多い 若者が多い 生活しやすい まちが清潔 子育てしやすい 健康的なまちづくり 駅が綺麗 利便性がよい 工業が盛ん 教育文化施設の充実 教育機関の充実 有名産業 商業施設の充実 就労場所が多い 歴史 かつめし イベントが多い 情報発信に力を入れている たくさんの特徴がある 治安がよい 人が優しい 地域組織が活発 地域の活性化に努めている 地域のつながりがつよい 地域の祭りが活発	自然 人口規模 出生率が高い 幅広い年齢 ベッドタウン／利便性がよい 生活しやすい環境 医療機関が充実 教育環境 清潔 働く場がある 若者が楽しめる場がある スポーツイベント 名物 歴史 地域のつながり 高齢者の健康意識が高い

表 3-2-1 属性別「強み」一覧

行政関係者	民間・市民活動／高齢者大学生	高校生	大学生
特徴がない ブランド力が低い シンボルがない PR 不足 地域毎に人口のばらつきがある 近隣とのつながりが弱い 地元の商工業の不活性 駅周辺が不活性 産業の衰退 大気汚染 若者が就職できる企業が少ない 東西の交通渋滞 道路が複雑でわかりにくい 南北の交通が不便 車が必要な地域がある 運転マナーが悪い 交通事故が多い 交通犯罪が多い 言葉がきたない 排他的な一面がある 地域への愛着が低い 地域への関心が低い	特徴がない 知名度が低い 魅力が知られていない PR 不足 2市2町の横の連携がとれていない 加古川を活かせていない 地域のつながりが弱い まとまりがない 農業の担い手不足 若年人口の減少 人の流出 駅前の不活性 買い物や遊びの魅力がない 基幹産業の衰退 経済的基盤が脆弱 産業の不活性 観光資源が少ない 町に活気がない 利便性の悪い地域がある 大学が1つしかない 楽しみが少ない 治水整備の遅れ 水質が汚い 大気汚染 南北の交通が不便 交通事故が多い 犯罪が多い 新旧住民の温度差 地域活動の高齢化 地域活動の不活性 地域づくりに無関心な層が多い 教育に関心が低い 核となる意見がない 飽きやすい気質で文化が育っていない 卑屈な仲間意識	特徴がない 知名度が低い 注目性が低い PR 不足 名所がない シンボルがない 地域の交流が少ない 田舎っぽい 人口が少ない 人口増加が少ない 若者があつまらない 過疎と高齢化 商業の不活性化 観光資源が少ない 巨大商業施設がない 図書館が少ない 市民病院の診療科の減少 都市と比較すると不便 利便性が悪い地域がある 大学が1校しかない 自然の減少 治水整備の遅れ 川の汚れ 臨海部の大気汚染 南北の利便性が悪い 交通事故が多い バスの本数が少ない 新幹線が止まらない 自転車や歩行者道路の未整備 レンタル自転車が未充実 事件が多い 治安への不安がある マナーが低い 地域活動に非協力的な人もいる 若者の態度が悪く治安が乱れている 新しい考えを受け容れない 国際化が遅れている	特徴がない 知名度が低い 観光資源が少ない 大都市と比べ活気がない 交流の機会が減っている気がする 過疎化 若者が楽しめる場が少ない 遊ぶところが少ない ショッピングセンターが少ない パチンコ店が多い 商品の品揃えが少ない 街頭が少ない 増水による被害がある(治水整備の遅れ) 不衛生 車がないと不便 交通が不便 渋滞が多い 道路整備が悪い 南北の交通が不便 交通マナーが悪い 放置自転車が多い 自転車事故が多い 交通事故が多い 治安があまりよくない

表 3-2-2 属性別「弱み」一覧

(2)「強み」の特徴

では個別の意見にも注目し、「強み」とされているものを詳細にカテゴリー化し列挙する。

①加古川と水の豊かさ

第一に河川である加古川の存在、さらに関連して水や水源、また加古川を中心としての地域文化やイベントなども挙げられている。加古川は、水のイメージや地域の象徴との位置づけでもある。下記に代表的な回答を示しておく。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 県下最大の河川「加古川」が流れる。
- ・ 地域全体が豊かな「水辺空間」に恵まれている。
- ・ 古来加古川の流れを軸に個性豊かな地域文化を育んできた。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 加古川本流の長さ 96 kmの下流にあって、多くの人々の水源を保っている。
- ・ ため池、川、用水が整備されており水の確保ができています。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 水源がある。
- ・ 「加古川」と言えば県外の人でも人が市内に流れる川を連想するほど、有名な川が流れている。
- ・ 川の周りの環境が整備されている。
- ・ 加古川河川敷にスポーツなど活動できる場がある。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 加古川があり水が豊富。
- ・ 水不足に困らない（ダム、加古川）。

②自然環境の豊かさと穏やかな気候

第二には、海に面し、加古川をはじめとする河川、さらに播磨平野を囲む山々と、自然環境の豊かさとともに、瀬戸内海に面し比較的安定した気候に基づく自然災害の少なさを「強み」として挙げている。自然が豊かで、しかし自然災害が少ないことが加古川地域の特徴とされる。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 加古川地域は海と山、川、湖という自然をすべて持ち合わせている。
- ・ 特に、大きな災害が発生することもなく、恵まれた地形環境である。
- ・ 海、山、川の自然に恵まれ、気候も穏やかで過ごしやすい。

- ・ 自然とふれあえる場所の多さ、気象条件など、様々な点において、「住みやすい」といえる地域である。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 気候、風土に恵まれ、安心して暮らせること。
- ・ 自然からの災害を受け難く、日本で一番安全な地域。
- ・ 身近に水辺・山・自然とふれあえる場がある。
- ・ 地形的に平坦で災害にもさしたる不安がない。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 絶滅危惧種の動植物が多く、海や川、池、湿地など多くのフィールドがある。
- ・ 自然が残っている。
- ・ 温暖な気候（瀬戸内海式気候）。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 自然が多い。
- ・ 気候が安定している。
- ・ 災害が少ない。

③東西に存する大都会との接続の良さ

第三には、神戸、阪神間との比較的近い立地、さらに交通の利便性によりそれら大都市との接続という点が指摘されている。加古川地域の位置をより広域から考える立場であり、同時にベッドタウンとして、住みやすく、そのため人口が維持できるなどの指摘もあり、これらの特徴の背景を示す内容でもある。また高校生、大学生は新快速が停車することを上げる回答も多く、身近な観点から地域の特徴を捉えようとしている。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 京阪神地区から通勤圏に位置しベッドタウン化することで人口を維持できている。
- ・ 神戸や姫路にもアクセスしやすく、日頃は近所で便利に、たまに神戸や大阪で買い物という使い分けができ、非常に「住みやすい」。
- ・ 交通の便も良く、神戸・大阪へも1時間以内で通うことができる。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 東西方向の道路、交通は整備され、大阪、神戸に1時間程度で移動でき、通学、通勤に便利であるため、阪神地域のベッドタウンとして機能している。

- ・ JR やコミュニティバス等を利用すれば便利に出かけられる。

【高校生】 からの代表的回答

- ・ 兵庫県南部の中央に位置するため、兵庫県内なら日帰りで移動できる。
- ・ 神戸や姫路に近い。
- ・ 新快速が止まる。

【大学生】 からの代表的回答電車の乗り換えが便利。

- ・ 加古川駅には新快速が止まる。
- ・ 東西の交通便が良い（JR、山陽電鉄、加古川バイパス）。

④適切な人口規模

第四には、人口規模が適切であることや適切な人口規模の結果もたらす地域的な特徴も挙げられている。田舎でも都会でもない、という表現がこれにあたる。また人口に関連しては、若年者が多いとの意見もある。確かに、加古川地域を含む東播磨は全県下でも比較的若年者が多く、平成 22 年の国勢調査結果による、15 歳未満人口の割合は、中播磨（14.8%）、阪神北（14.5%）、東播磨（14.2%）の順であり、これを反映したものと思われる。

【行政関係者】 からの代表的回答

- ・ ベッドタウンとして、人口が増えてきた街であり、とても住みよい街である。
- ・ 人口が多すぎないため、街へ出かけて駐車場に困ることもない。
- ・ 田舎すぎず（不便さを感じない）、都会すぎない（騒がしくない）ところ。

【民間・市民活動／高齢者大学生】 からの代表的回答

- ・ 潜在的なポテンシャルという意味では、人口が 268,000 人（加古川市）いること。
- ・ ベッドタウンとして発展している面もあり、若い世代が比較的多い。
- ・ 微増だが人口が増えている。
- ・ 商業施設もある程度ある割に田舎を感じる場所もある。
- ・ 効率的な規模（30 万人）。

【高校生】 からの代表的回答

- ・ 人口がとても多い。
- ・ 若者が多い。
- ・ 適度な田舎感、都会感。

【大学生】 からの代表的回答

- ・ 面積が広く、人口が多い。
- ・ 東には神戸、西には姫路と都市が東西近くにある適度な田舎。
- ・ 合計特殊出生率が高い（子どもが多い）。

⑤産業立地と盛んな経済活動及び集積の存在

第五には、経済活動が盛んであることや学校や公共施設の立地である。経済活動については、製造業が盛んであることと商業集積に触れられている。商業集積や学校など公共施設の立地は、この地が利便性の高いこと、またベッドタウンとしての特徴を有することを示しており、回答者がそれを「強み」と考えている。また人口規模もこれらに影響をするため、前述の適切な人口、比較的多い人口とも関連する点といえる。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 南部地域では工業が発達している。
- ・ 南部の住宅地には大型の商業施設が数店舗あり、生活を送るうえでは便利な環境。
- ・ 陸上競技場、体育館などのスポーツ施設、市民会館やウェルネスパークなどの施設がある。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 明治維新後の近代的産業であった多木化学、日本毛織(株)の他、大真空は水晶を使った電子部品を、ティエルブイはスチームトラップの自動弁を製造している。
- ・ 神戸製鋼所、オークラ輸送機等、独自の製品を開発して大きくなった企業が多い。
- ・ 加古川に「大学」がある事。
- ・ 生活圏としての充実。
- ・ 病院や高齢者介護の施設はほぼ充足している。
- ・ 生活面ではスーパーの競合で食品等の物価が安い。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 高砂や浜の宮に工場地域がある。
- ・ 地域の産業（靴下など）。
- ・ 学校がたくさんある。高校が多い。
- ・ 図書館、公民館などの公共施設が近辺より多い。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 神戸製鋼所加古川製鉄所がある。
- ・ 近くに店が密集しているため便利。
- ・ 医療機関が充実しており、保健活動も活発。

- ・ 物価が安い。スーパーやホームセンターが多い。
- ・ 兵庫大学がある。

⑥文化・歴史的な蓄積

第六には、文化や歴史的資源の存在、またイベントなどの活動が盛んとの指摘もある。播磨地域は古来より豊かな地域であり、万葉集や播磨国風土記など古来からの記述にもみられる地域である。また歴史的蓄積以外にイベントについても触れられており、ハード面での施設のみならず、ソフトについても地域で「強み」とされている。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 歴史や伝統のある美しい町。(石の宝殿や鶴林寺など、歴史的にもはやくから開けていた土地)
- ・ 映画のロケ地として使われている。
- ・ 加古川マラソンやツーデーマーチ、踊っこまつりなど、大きなイベントが開催される。
- ・ 播磨国の中心として栄えた歴史があり、相応の歴史的な遺産や、文化的景観を域内各地で見ることができる。
- ・ 「ため池群」などは、長い歴史があるからこそ、他の地域に見られない文化がある。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 古い歴史がある。教信寺、太子堂。
- ・ 古墳前期の古墳が5基も日岡にありその後西条や平荘湖へと移っていく全国でも珍しい長く続くエリア。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 大河ドラマ。ツーデーマーチなどの地域行事。
- ・ 夏には加古川花火大会があつて、秋にはツーデーマーチがある。
- ・ 鶴林寺がある。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 国宝である鶴林寺がある。
- ・ 黒田官兵衛の妻、光（てる）のゆかりの地。

⑦コミュニティの強さ

第七には、人と人のつながりやコミュニティ意識の強さなどである。都会すぎない、という「強み」の一つの背景とも思われる。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 昔ながらの人付き合いがある（濃すぎない）。
- ・ 周りにどんな人が住んでいるのか何があったのか地域の情報が口コミで伝わってくる（農村地域）。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 他のまちに比べてコミュニティが残っている。
- ・ 町内会の組織。加入率が同規模の他市に比べると高いといわれる。
- ・ 加古川の市民の人々は、皆加古川の町を大切に思い大好き。
- ・ 地域との共生がふるさとをつくる「強み」。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 加古川を活発にしよう、盛り上げようとする人が多い。
- ・ 近所づきあいがある。
- ・ 子ども会の活動が活発。

このように、「強み」としては、地理的な特徴としてある、穏やかな気候であり、河川など水資源や自然に恵まれ、同時に都市部に挟まれた立地からの利便性や産業や各種施設などの都市的な機能の集積、生活の利便性が指摘されている。田舎すぎず、都会すぎない、という表現、あるいはその結果として住みやすい、との回答が的を射ているといえる。さらに歴史的な集積や人のつながりやコミュニティの強さなど、ソフト面でも「強み」が指摘される。

(3)「弱み」の特徴

次に、「弱み」とされているものを、同じくカテゴリーにまとめ示す。

①アピール力の弱さ

第一に、特徴がないことからの地域の持つアピール力の低さ、さらにそれに起因する知名度の低さが指摘される。観光地が少ない、名物となるものがない、など物理的な内容を挙げるケースも多い。また実は魅力はあっても、それらを効果的に発信していない、という点も指摘されている。姫路や神戸などブランド力、発信力のある地域に囲まれ、埋没しているとの危機感でもある。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ かつめしなどの名物の知名度が低い。
- ・ 都市としてのブランド力が弱い。
- ・ 他地域にアピールできるような、特色が無い。
- ・ 大多数の住民は「この地域には取り立てて何かあるわけではない」との認識を持つ。
- ・ 魅力は様々あるが、それらについての発信、浸透がまだまだ進んでいない

- ・ 姫路や神戸に比べて、シンボリックなものが少ない。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 人に自慢する特徴が無い。
- ・ 一級河川が生かせていない。
- ・ 魅力的な観光資源が少ない。
- ・ 街を説明するのに神戸と姫路の間という程、誰もが知っているものがない。
- ・ 姫路や明石にはさまれて少々のイベントも広がることなく宣伝が難しい。
- ・ 加古川は「何もない」と思う人が多い。
- ・ 姫路や神戸などと比べ今一つ知名度が低い。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 観光地として目玉となるものが鶴林寺しかない。
- ・ これといった名物がない→加古川地域の良さが伝わりにくい。
- ・ 有名なものが県や日本単位ではまだまだ知られていない。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 地味。ぱっとするものがない。
- ・ 観光地が少ない。
- ・ 文化を発信できていない。

②地域の中心性やまとまりを欠く

第二に、地域的なまとまりが十分ではないことや、地域内のアンバランスである。地域のまとまりについては、例えば、効率性を重視し人口を基準に行政界を定めたため、課題も生じた平成の大合併と同様に、加古川地域として挙げた、東播磨の二市二町においても、それぞれ歴史的な成り立ちや特徴、人口規模が異なり、そもそも一体的なイメージを持ちにくい。かつてであれば、河川の上流、下流として、三木市、小野市など北部地域を含めての構造も存在しえたが、現在はそれら北播磨の地域は、高速道路により、直接大阪と結ばれる構造となっている。この点、次にも触れるが、地域内交通網の欠如により、中心性が存在しないことにも影響する。さらに加古川市のように、沿海地域から丘陵、山地まで有する場合は、同じ市内であっても経済的、産業面、人口集積で違いが大きく、まとまりを欠くように見られる。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 東播磨の中核都市という意識におぼれて、足元にある大切なものを見失っている。
- ・ 他地域（加古川以外の近隣）とのつながりが弱い。

- ・ 明石や阪神地域、姫路との比較の中で埋もれてしまう。
- ・ 加古川市では南部の人口は増加する一方、北部では過疎化し、人口の二極化が進む。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 商業圏が外に取られやすい。
- ・ 住環境として恵まれている地域は沿岸部のみ。
- ・ 横の連携がうまく取れていない。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 過疎、過密化→小学校でクラス数が増えすぎたり、学年の人数が減りすぎたりしている。
- ・ 地域同士の交流が少ない。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 地域によってばらつきが多い。

③交通網の弱さ

第三に、交通網の弱さである。「強み」では東西の交通網が強いことに触れたが、これは広く、大阪から姫路にかけての、大阪湾ベイエリアにおける連坦都市構造の一端を担うことであり、裏を返せば、加古川地域内での交通網や南北交通の「弱み」となって現れる。前述の地域内のまとまりを欠くこととも関連するが、地理的構造においても中心となる地域から交通網が四方に伸び、結末点に準中心となる市街地があるというものではなく、各地に小規模の中心集積地が存する構造であり、しかしそれらを結ぶ交通網が形成されていないため、中心性が弱く、結果、域内移動が個別手段に依存することとなり、交通網の弱さにつながる。特に、高校生、大学生は（公共）交通手段の少なさを挙げ、自動車に依存していると気づかない面を指摘している。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 東播磨南北道路の整備が進められるが、南北の交通網がまだ弱い。
- ・ 自家用車での移動が必要な場所も多い。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 南北方向の道路、交通には問題が多い。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 交通手段（バスなど）が少ない。
- ・ 南北の公共交通機関のアクセスが悪い。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 南北の交通便があまり良くない。
- ・ 中心地から離れると交通の便が悪い。

④高い犯罪発生率・事故発生率

第四に、犯罪率の高さ、交通事故の多さである。高校生、大学生では複数の参加者がそれを指摘しており、防犯等に対し意識が高いことがわかる。ちなみに、兵庫県警によると街頭犯罪・侵入犯罪の認知件数では加古川市、高砂市、播磨町では自転車の盗難が圧倒的に多く、被害に遭った、あるいは周囲に被害に遭ったという参加者もあるかもしれない。さらに街灯不足や自転車マナーの問題など、事件、事故につながる可能性のある要因も挙げられている。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 犯罪の発生率・交通事故の発生率が多い（加古川市の人口1人当たり犯罪の発生件数は神戸市、尼崎市に次ぐ）。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 交通事故の発生件数が多い。
- ・ 犯罪が多い。（規範を守る意識が少ない？）

【高校生】からの代表的回答

- ・ 治安が不安な部分もある。
- ・ 事件が多い。
- ・ 交通事故発生件数が県に比べどの市も多い。
- ・ 夜遅くに叫んでいる人がいてうるさい。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 治安があまりよくない。
- ・ 安全面で危険だと思う箇所がまだまだたくさんある。
- ・ 大きな道路からはずれるとあまりにも街灯が少ない。
- ・ 自転車利用のマナーが悪く、放置自転車が増えている。
- ・ 深夜、バイクの音がうるさい。

⑤経済活力への将来不安

第五に、経済活動や産業立地への将来不安が挙げられる。臨海部工業地域に依存する経済であること

から、経済変動により地域経済への影響が大きい。一方で、ダイナミックに産業構造が変化する兆しが見えず、駅前など衰退も目につくため、不安も大きくなっている。ただし、高校生、大学生にはあまりその指摘はなく、製造業依存の意識は小さいのかもしれない。

【行政関係者】からの代表的回答

- ・ 地元の商工業の見なおしが必要。
- ・ 就職できる企業が少ない。
- ・ 特定の産業に依存しており、衰退により地域の活力が低下する。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ 基幹産業の衰退でそれに替わる優良企業の誘致が滞っている。
- ・ 臨海部に位置する神戸製鋼所への依存が圧倒的に高く、他の産業が育っていない。
- ・ 街や駅前の活力が失われている。
- ・ 企業城下町なので製造業の影響を直に受けてしまう。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 商店街が暗くなってきている。

⑥地域づくりへの人的な面での不利

第六に、地域づくりへの人的な側面での不安や不利の指摘である。リーダーシップの不足や自立心の弱さなどが含まれる。

【民間・市民活動／高齢者大学生】からの代表的回答

- ・ ボランティア達と共存共栄したり、市民の力を認めることがない。
- ・ 他からの意見に流れやすい。
- ・ どのように改善していけば良いのかも自分達で考えなければならない。
- ・ 元々の住民と新しい住民との温度差がある。
- ・ 突出しようとするリーダーを嫌う気質がある一方、強いリーダーに意見を言わない。
- ・ 地域活動と行政の連携や支援制度が不十分である。

【高校生】からの代表的回答

- ・ 地域の人たちと協力する人もいるが、協力しない人もいる点。
- ・ 若者が集まらない。

【大学生】からの代表的回答

- ・ 近所付き合いが減っている気がする。

このように、「弱み」は、加古川地域というエリアを想定した場合、そのまとまりや地域構造に「弱み」のあることがわかる。地域内の各地には良い資源があるが、加古川エリアとした場合の訴求力の低さが指摘される。さらに経済的な立地の特性と変化が不十分であることからの活力の低下、また人的資源の問題から、将来のまちの衰退や地域の活力低下への不安の要素が大きいことも特徴といえる。犯罪や交通事故の多発は、体感治安の悪さの背景となっているが、回答ではマナーや市民の行動からその要因を示す記載もある。ベッドタウンで住みやすいところであるがゆえの、課題と捉えられる。

(4) 加古川地域の特徴から見られる地域要素の視点

以上の分析を踏まえ、加古川地域の特徴に関する地域要素の視点を提供する。分析の視点とは、地理的な要素でもあって、「強み」「弱み」の要因となるものである。そのためその視点的提示は、地域の価値を計測することや将来に係る予想などにも活用できると考えている。また、議論の段階での位置付けを考える上でも重要となるだろう。

第一に、「地域構造の視点」を提示する。地域構造には、その地形や存する自然などの環境と、相対的な位置関係を含めて形成される地理構造の要素がある。前者は、特に県下最大の一級河川を擁するという加古川地域独自の特徴を含め、気候なども含め、その地域たらしめ、特徴とする上で欠かすことができない視点である。環境を人々がどのように捉えているかは、例えば「強み」では自然の豊かさや加古川の存在などに表れている。

後者の、加古川地域の地理構造を考える場合、より広域、つまり関西都市圏や兵庫県における位置関係から捉えられる特徴も影響する。そのためか加古川地域では、大阪からの連坦する都市圏にあって、地域内での中心性の存在は小さく、階層性を成すこともないため地域全体の特徴を捉えにくくしている。一方で、この地理構造の「強み」は、大きな都市圏に連なることの、交通や経済活動での利便性として指摘され、逆に「弱み」は、そのため埋没することへの懸念や中心性を欠くため地域内の交通の不便さに表れている。

第二に、「集積の視点」を上げることができる。集積としては人口があり、これらは人口規模として取り上げられる。人口の過疎過密の問題は、戦後日本の均衡ある国土発展における主要なテーマであったが、加古川地域では、少なくとも回答者は「強み」に判断をしている。極端に過疎でもなく、逆に過密ゆえの問題も小さいと考えられている。しかし、回答者は現在の集積を、将来においてその集積の維持が困難であること、変化の難しさに懸念も持っている。人口集積は生活関連施設や教育機関などの集積とも関係する他、なぜ人口が集積をするのか、という集積の要因とも関連する。例えば、高校生や大学生は生活関連施設の集積を、また行政関係者や民間・市民活動／高齢者大学の関係者は、産業集積を「強み」と捉えており、この点は製造業の集積により人口が拡大した時代、ベッドタウンとして人口が拡大した時代を反映し、世代による集積の捉え方の相違があったといえる。

第三は、「無形の社会資本の視点」である。無形の社会資本を的確に評価することは地域の魅力や競争力の側面で重要な視点とされる。この視点は3つの内容にわけることができる。まずは歴史で、古代か

ら現在までの歴史的な遺産の継承について多くの回答者は「強み」としているように、これは畿内に続く播磨の地としての加古川地域の特徴である。次に、現代における無形の社会資本としてのイベントも挙げる事ができる。イベントは集客を促すだけではなく地域のアイデンティティとも関わることである。これらも回答者は「強み」としている。最後が社会的関係資本（ソーシャルキャピタル）である。人々のつながりや関わり、互恵性、あるいはコミュニティの親密さなどがあり、「強み」としてしっかりとしたコミュニティの存在が挙げられるが、一方で、広いエリアでの協力の不足やそれらを活かすことを難しくするリーダーシップの欠如などが「弱み」として挙げられている。また社会的関係資本の多い地域では犯罪なども少ないとされる。互いのつながりが強い地域に犯罪を指向する者は入り込みにくいのである。この点から「弱み」として挙げられている犯罪率の高さ、交通事故率の高さは、ソーシャルキャピタルの低さを示すものである可能性は高いので、注意は必要であろう。

(田端和彦 久井志保)

第4章 世代を超えた熟議

～議論の成果～

1. 議論の成果を捉える

昨年度開催した「熟議 2012 in 兵庫大学」同様「熟議 2013 in 兵庫大学」も、「熟慮」と「議論」で構成された。熟慮の段階での参加者で共通する意見については、第3章での分析に示した通りである。

「熟慮」の段階での個々の意見は「議論」によりどのように変化したのであろうか。すなわち、参加者は「議論」により、加古川地域に対しどのような共通認識を持ち、未来像を描いたのか。そしてそこから、私たちがこれから為すべきことは見えてきたのだろうか。それらを知るには、「議論」が行われたグループ（テーブル）毎にそれを再現し、その結論を考察することが必要になる。

「議論」は、ワークショップの手法を用いている。参加者はお互い立場を越えて「議論」を重ね、そして結論を導いていく。その際に、ツールとして、付箋（ポストイット）と模造紙、そしてマジックペンを用いた。しばしばワークショップで使用されるが、KJ法の一部を活用する方法であり、自分自身の意見を付箋にマジックペンで記述し、意見の内容を説明しながら、模造紙に貼り付け、参加者が議論をしながら、付箋の位置を貼り替えたり、マジックペンで線を描いたりして、「議論」を模造紙に書き込んでいくのである。完成した模造紙は、「議論」の結果であると同時に、どのような意見が参加者から発せられたのかを記録したのものである。関連する付箋が重なり合い、またマジックペンで彩られたラインが交差するそれは曼荼羅図さながらに「議論」の世界観を示しているのである。

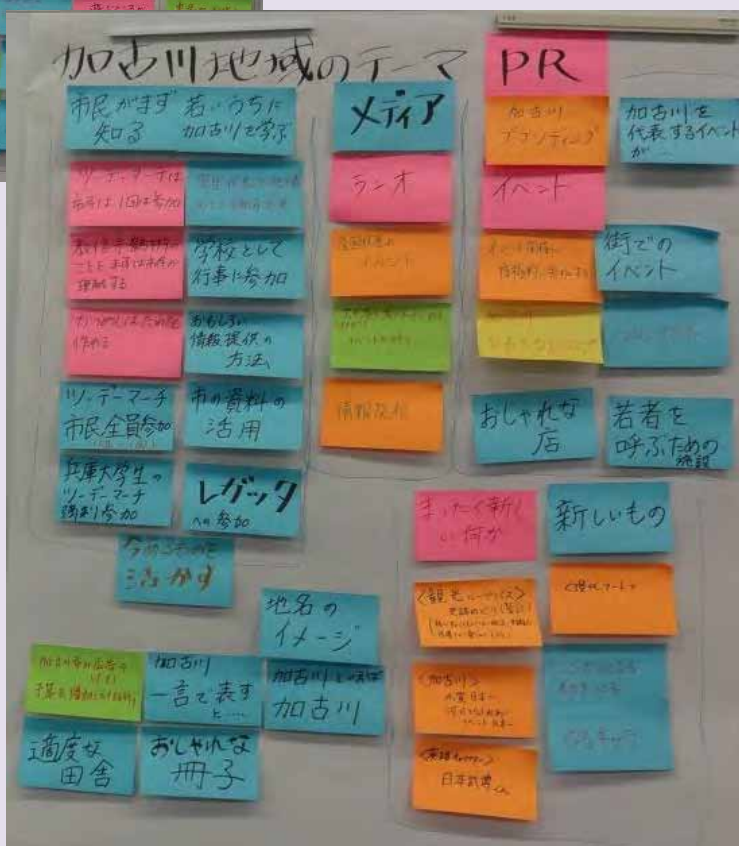
以下、当日模造紙に描かれた記録の写真を掲載するとともに、その下にグループ毎の議論を再現すべく【解説】として議論の要点を記述している。グループはAからKまで11あり、それぞれが前半では加古川地域の「強み」「弱み」について意見を出し合い、後半では前半出された意見よりテーマを選択し、そのテーマに沿ってさらに議論を掘り下げている。

（解説者 グループA～C：小林洋司、D～F：井上朋子、G～I：木下幸文、J～K：北島律之）

グループA



前半



後半

【解説】

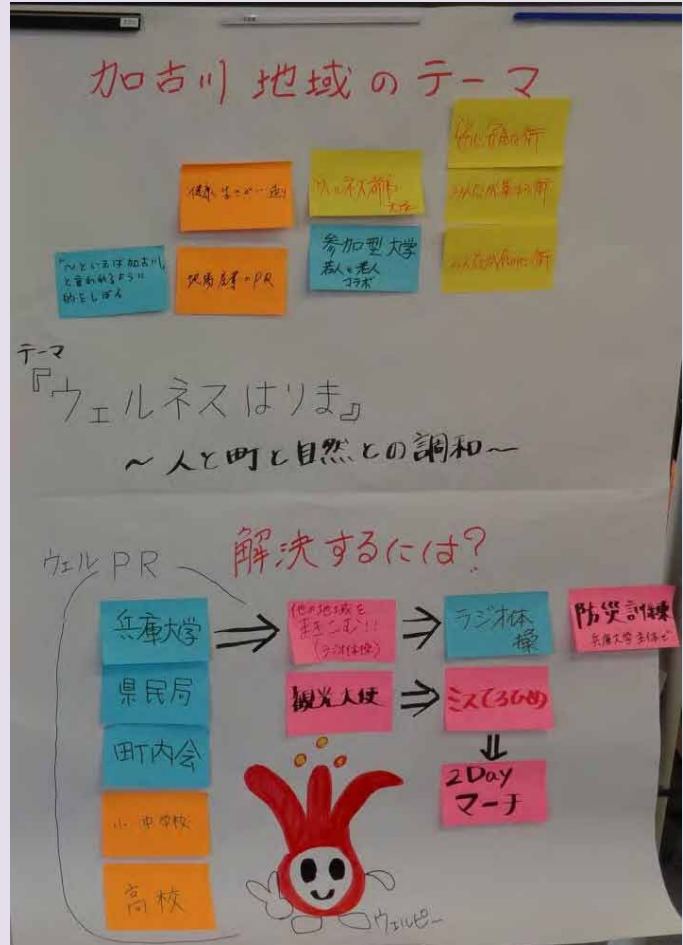
加古川地域の「強み」と「弱み」を出し合う前半では、ポジティブな評価としては、自然、ないしは文化的資源を有することが挙げられ、ネガティブな評価としては、治安、交通の不備やランドマーク、若者が集う場所の不足などが挙げられていた。

後半の議論では、「加古川地域をどのようにPRするか」ということと、「若年層を中心とした地域住民に対する教育」についての2点が論点として挙げられ活発な議論が交わされた。Aグループの議論として特徴的であったのは、加古川地域のPRについてその方法ばかりに注目するのではなく、地域住民の地域を知ろうとする学びの重要性に「未来への展望」を求めたことであった。そのなかで兵庫大学という存在が果たす、物理的、情動的なハブの役割があるということが議論されていた。

グループB



前半



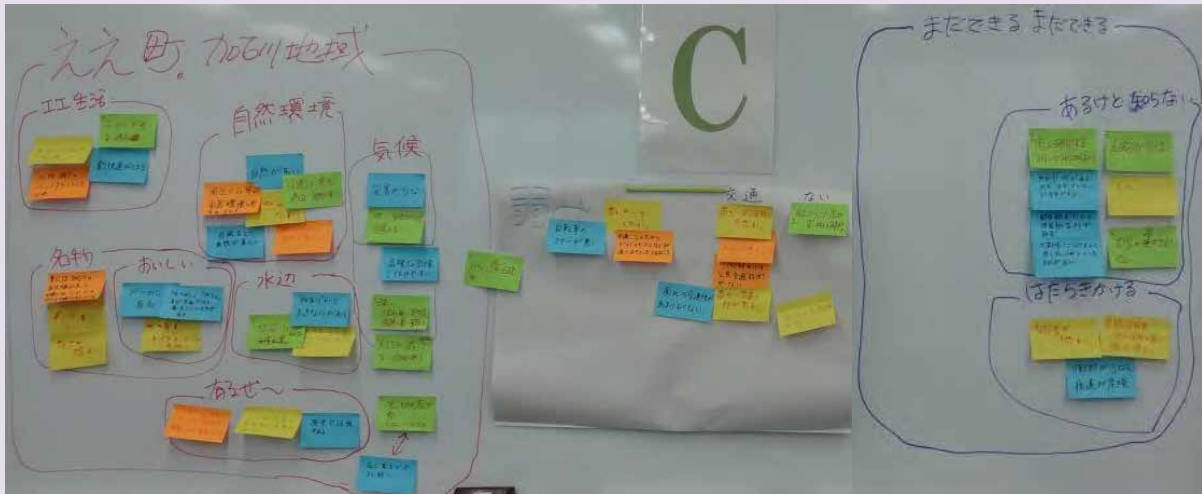
後半

【解説】

前半においては、川の重要性をはじめとした地理的な側面からプラスとマイナスの両方の意見が出された。また、町内会の組織率の高さ、災害が少なく、ベッドタウンとして住みやすいといった社会的な側面からの意見交換も行われた。そして交わされた意見を「人」「観光」「食べ物」「自然」「生活」といった概念にまとめ直した。

後半は、上記の分類を基礎にしながらか議論をより深めた。そして「イ（イベント）・食・住」という分類を提起し、「ウェルネスはりま」というテーマで未来づくりを行っていくという結論に至った。そのなかでの兵庫大学の役割として「話題提供」「防災活動」の拠点として活躍して欲しいという意見が出された。

グループC



前半



後半

【解説】

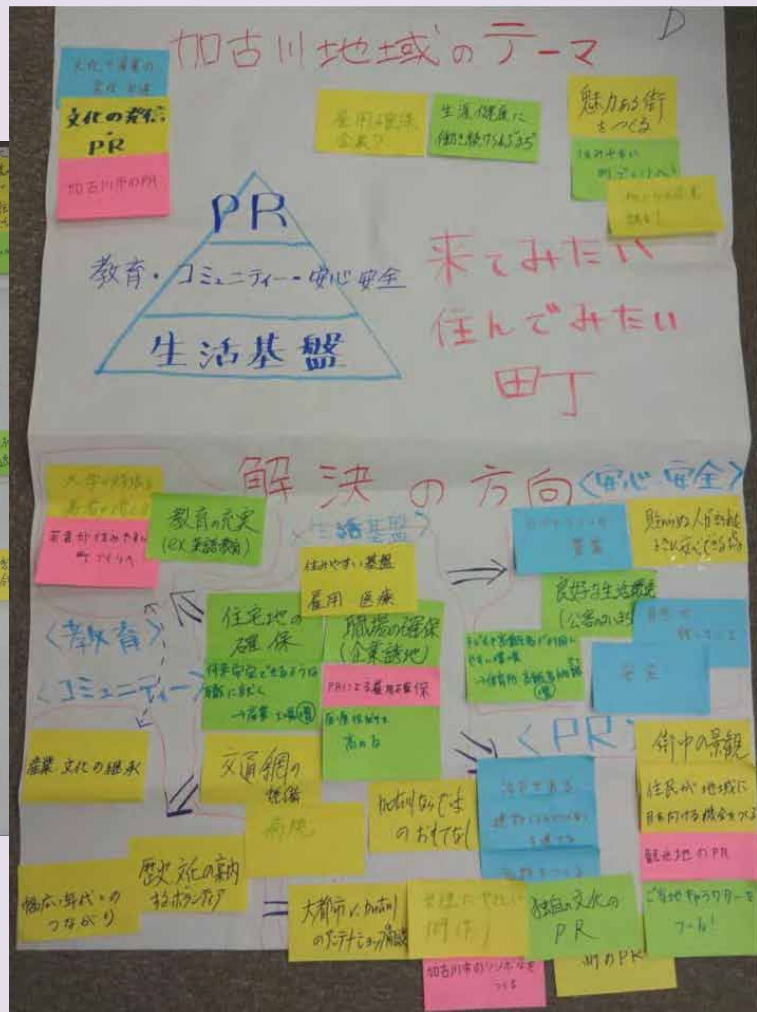
前半の議論は、「強み」と「弱み」を出し合い、それぞれに「ええ町、加古川地域」「まだ、できる。まだ、できる。」というテーマをつけ、現状と課題について意見交換が行われた。「強み」のテーマである「ええ町、加古川地域」としてまとめられた意見としては、①気候の良さ、②自然の豊かさ、③名物があること、④住みやすさ、⑤歴史・伝統・文化があること、などが指摘されていた。逆に「弱み」である「まだ、できる。まだ、できる。」というテーマで出されていた意見は、①長所はあるが知らないこと、②交通の便の悪さ、などが指摘された。

後半は、こうした意見の中から「加古川に来て、楽しい、住んで楽しい街にしよう」をキャッチフレーズにその方法について議論が交わされた。情報の発信の方法や、自治体や大学を中心にしたコミュニケーションの提案など有益な議論が交わされた。そうした動きの中で大学が実際に「行動していくこと」の重要性が共有された。

グループD



前半



後半

【解説】

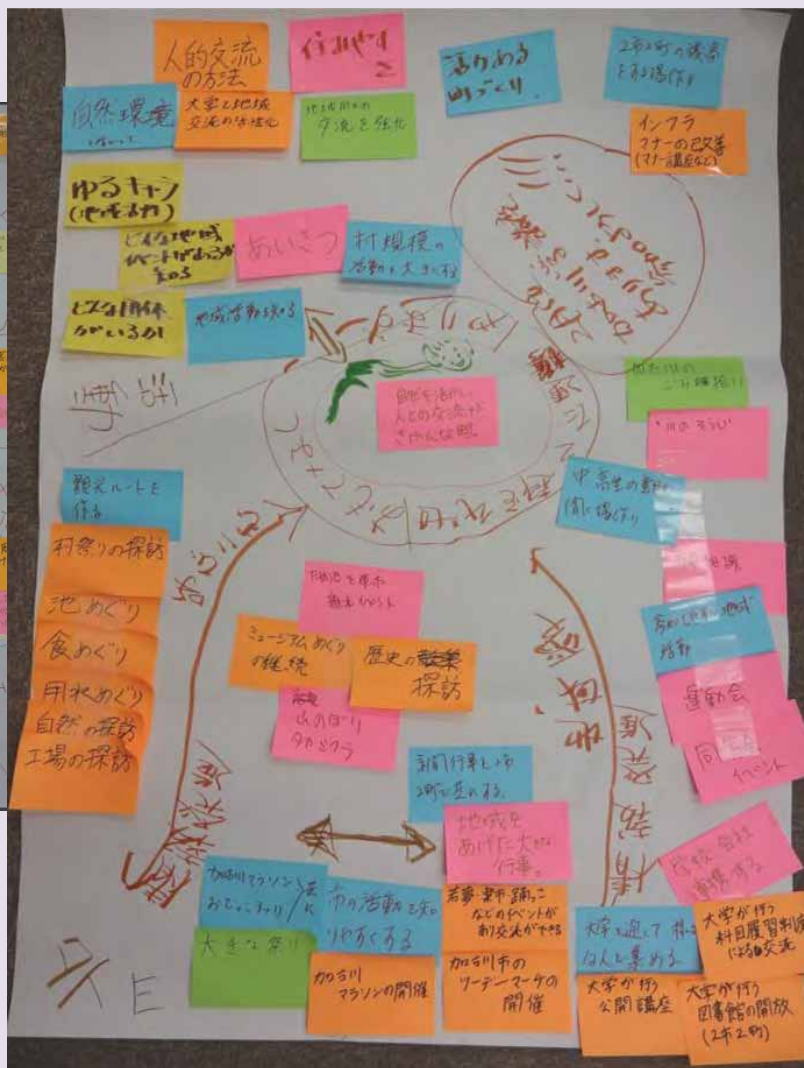
加古川地域の「強み」及び「弱み」として出された意見は、双方とも「住みやすさ」、「自然環境」、「交通」、「歴史・文化」の4点に集約された。

そこから、議論のテーマとして、「来てみたい町、住んでみたい町」が掲げられ、テーマの解決策が話し合われた。さらに、出された解決策は、「生活基盤」、「教育」、「コミュニティ」、「安心・安全」、「PR」に集約された。結論としては、三角ピラミッドの図を用いて、次のようにまとめられた。加古川を「来てみたい町、住んでみたい町」にしていくためには、まずは住居、雇用、医療等の生活基盤を安定させる必要がある。その上で教育を充実させるとともに、産業や文化が継承されるように幅広い年代のコミュニティを形成すること、そして、子どもや高齢者が安心・安全に暮らせる町づくりへと繋げていく必要がある。そうすることで、全国へ、世界へと、よりPRできるような加古川の町、文化、産業が成立していくだろう。そして、住民が「あの加古川」に住んでいるんだよ」と胸を張って言えるような町になっていくだろう。

グループE



前半



後半

【解説】

まず、加古川地域の「強み」として出された意見は、「自然」、「産業」、「交通」、「イベント」、「歴史」、「食」、「住」、「施設」に集約された。一方、「弱み」としては、「交通」、「観光」、「交流」、「マナー・治安」、「インフラ」、「高齢化」、「都市の知名度」に集約された。

そして、後半では、「自然を活かし、人との交流が盛んな町」をテーマに、世代を超えて交流ができる加古川地域の町づくりについて話し合われた。その結果、加古川地域内では、イベントを行い、地域愛をもって世代を超えたコミュニケーションの場を増やすこと、加古川地域外へは、様々なイベントを企画するとともに情報発信を行い、人を呼び込む必要があるという結論に至った。具体的な活動方法としては、まずは人と人が繋がる基本となる「あいさつ」が大切である。また、「ゆるキャラ」も効果的であろうとされた。

グループF



前半



後半

【解説】

まず、加古川地域の「強み」として出された意見は、「自然が豊か」、「歴史が豊か」、「地域性」、「アクセスが良い」、「気候が良い」等に分類された。一方、「弱み」としては、「マナーと安全性」、「交通の利便性」、「認知度が低い」、「地域への愛着心」等にまとめられた。

そこから、地域に対しての愛着心を持つ人が減少していることに着目され、「地域への愛着心について」をテーマに、その原因と対策が話し合われた。原因には、若者にコミュニケーション力が不足していること、地域と住民の接点が少ないこと等が挙げられた。対策としては、若者が多数参加する行事やお祭りを増やす必要があるという意見が出され、それを実現するためには、地域や行政の協力、また個々の強い意志が重要であるとされた。また、より地域への愛着心をもった人々を育成するためには、普段から行政と連携を取る必要があるとし、小中学校の授業の中に地域について考える時間を取り入れる等といった具体策も出された。

グループG



前半



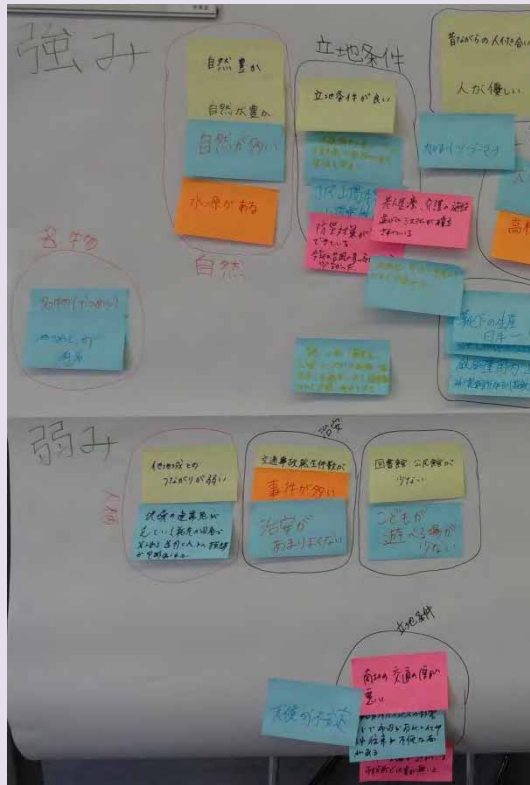
後半

【解説】

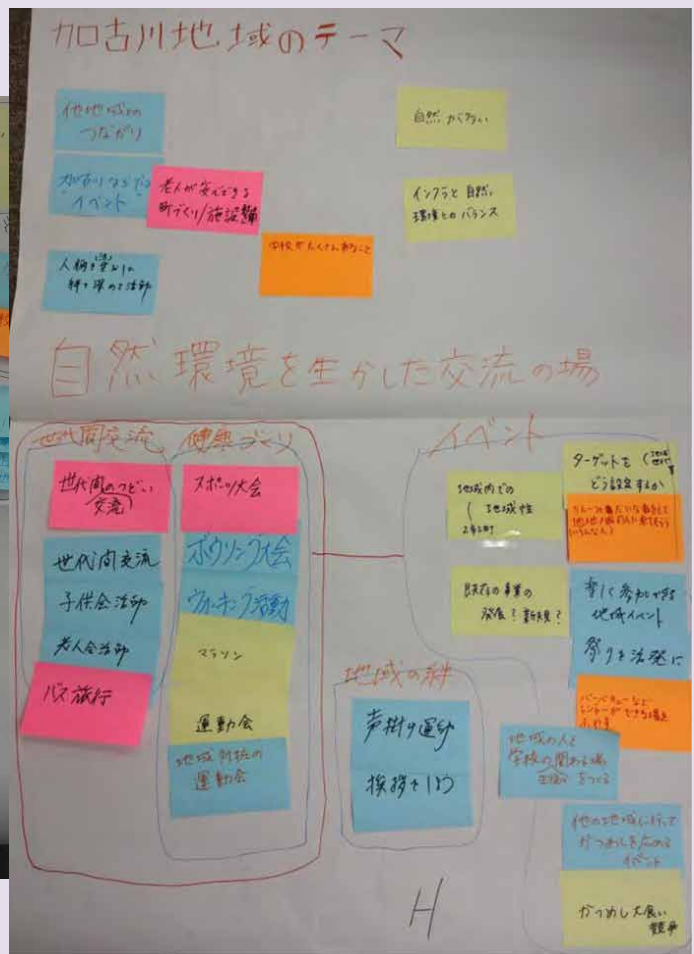
前半の議論では、地域とのつながりや観光面などが加古川地域の「強み」として挙げられた。しかし、地域の「強み」と「弱み」の議論が進んでいく中で、加古川地域は都市間のアクセスがよいという意見の一方で、南北方向の道路整備が不十分であるということ、また地域の治安はよいという意見に対し、犯罪が多いという意見が出されるなど、様々な項目について中途半端な印象があるという結論に至った。

前半に挙げられた意見の中で、地域のつながりという点について後半の議論が展開された。地域のつながりをさらに強化して行く必要があると考えられるが、現状では、地域住民のそのような意識は低い傾向にある。この点を解決して行くためには、まず加古川地域の歴史について知る必要があるのではないかと意見が出された。そして、地域の歴史を理解することによって地域のつながりに対して関心が高まっていく。この歴史認識が高まることによって地域住民のツーデーマーチなどの大きなイベント参加に繋がっていくのではないかと。また、マスコットや地域の名物など地域のよさをPRすることによっても地域のつながりに対して関心が出てくるのではないかと結論に至った。さらに、これらの問題に町内会などにも参加してもらう必要があるのではないかと意見も提起された。

グループH



前半



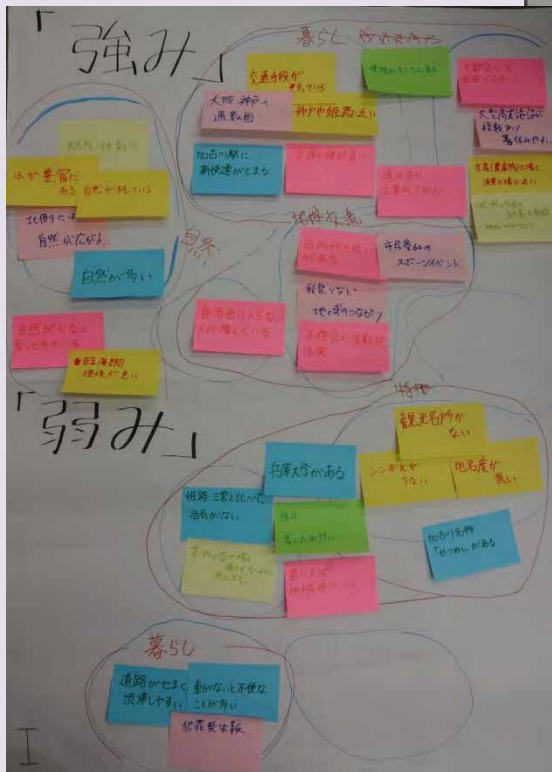
後半

【解説】

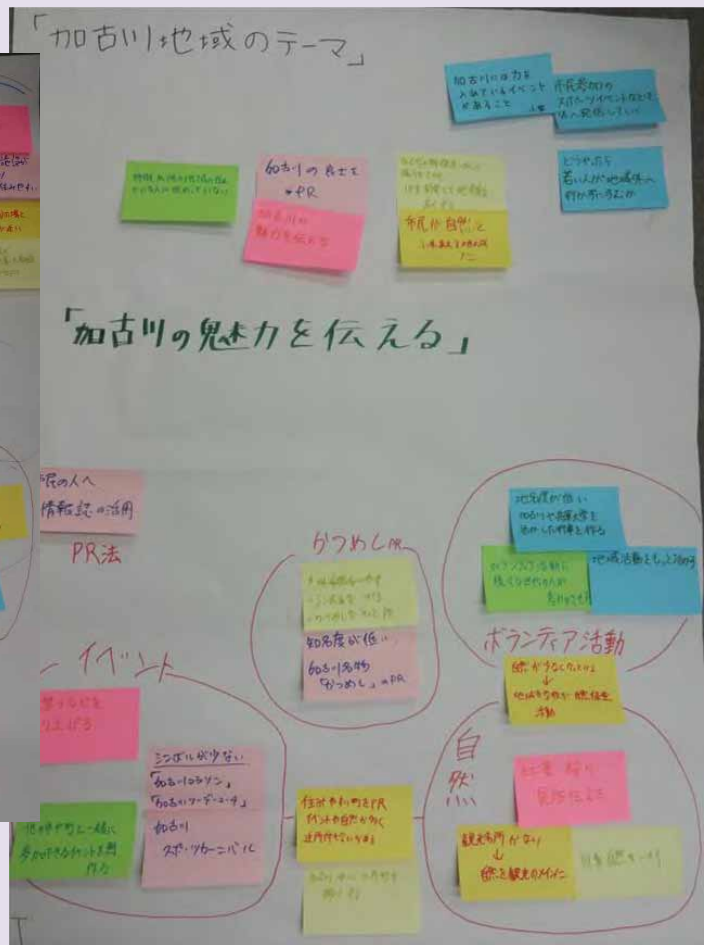
地域の「強み」としては、名物（かつめし）、自然（水源などもあり、豊か）、人柄のよさ、立地条件（交通アクセスや防災対策）、学校（大学、高校が多い）、産業（日本を代表する産業）という6つの項目に分類された。また、「弱み」としては治安（事故や事件が多い）、人柄（地域の連帯感が薄い）、立地条件（東西に対する南北アクセスの脆弱性）という意見が出された。

グループHでは自然環境を生かした交流の場をテーマとして後半の議論が進められた。後半の議論は「世代間交流」「健康づくり」「イベント」「地域の絆」という4つの項目に集約された。「世代間交流」では子ども会活動や老人会活動の必要性、「健康づくり」ではボーリングやマラソンなどのスポーツ大会、地域対抗の運動会などを開催するなどの意見が出された。また「世代間交流」や「健康づくり」を進めていくための「イベント」として、祭りの活性化、地域・学校の関われるような場を設定する、レジャー施設の拡充などが挙げられた。しかし、「イベント」を実施する上で世代・地域などのターゲットの設定や、地域性（2市2町）についてどのように考慮するかという意見も出された。グループの結論としては、イベントなどを行うことによって他地域との交流を進めていき、地域内においては声かけ運動や挨拶などによっていろいろな人とのつながりを大事にし、さらに「地域の絆」を深めていくことが大事であると結論づけた。

グループ1



前半



後半

【解説】

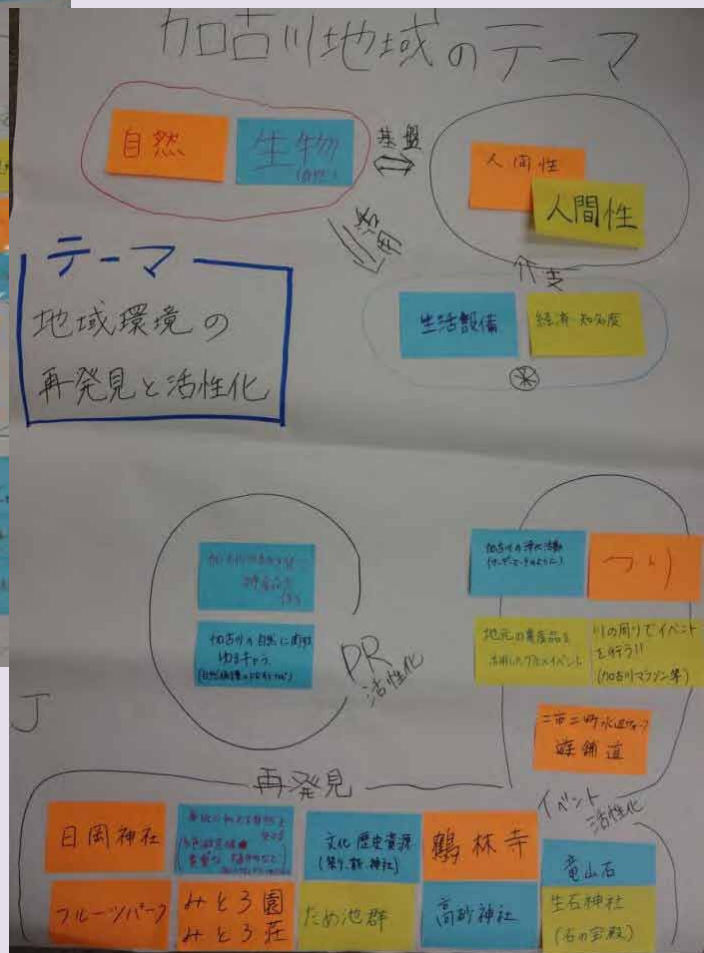
加古川地域の「強み」として「自然」「暮らし」「地域交流」が挙げられた。「自然」としては地域に自然が多く残っていることや水が豊富にあることなど、「暮らし」としては交通の便がよい、大型商業施設が存在する、大阪や神戸への通勤圏である、落ち着いた雰囲気のある街であるなど、「地域交流」として多数の市民参加イベント、秋祭り、子供会活動や近所付き合いがあることなどが意見として出された。また、「特徴」という分類項目では、兵庫大学やかつめしなどの強みもあるが、観光名所がない、知名度が低い、活気がないといった弱みもあることが挙げられていた。「自然」「暮らし」「地域交流」が強みとして挙げられたが、例えば「暮らし」については車がないと不便であることや道路が狭く渋滞しやすいなど強みと考えられる項目であっても弱みとして考えられるものもあるという意見もあった。

加古川の魅力をPRするためにはどのようにすればよいか（そのためには何が必要か）について後半の議論は進められた。魅力を伝えるための手段として、様々な祭りやマラソンやツーデーマーチなどのスポーツイベントを活用する、加古川名物であるかつめしをPRする、地域活動やボランティア活動、観光のメインとして自然を取り上げることなどがその方策としてまとめられた。

グループJ



前半



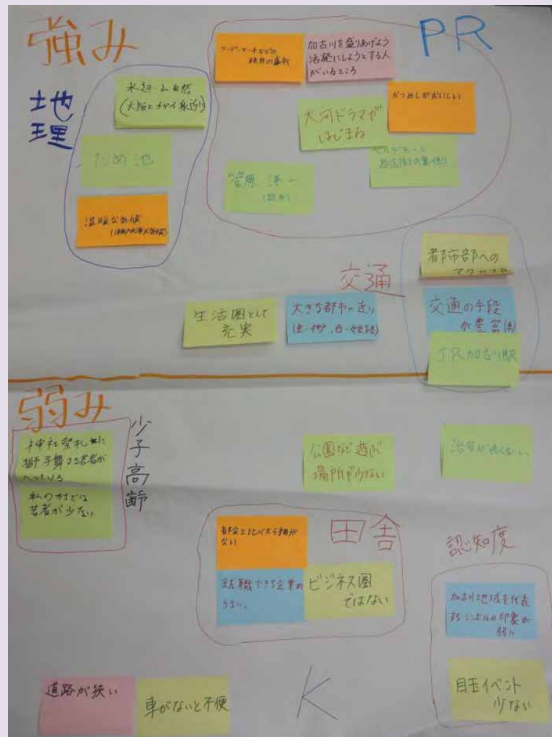
後半

【解説】

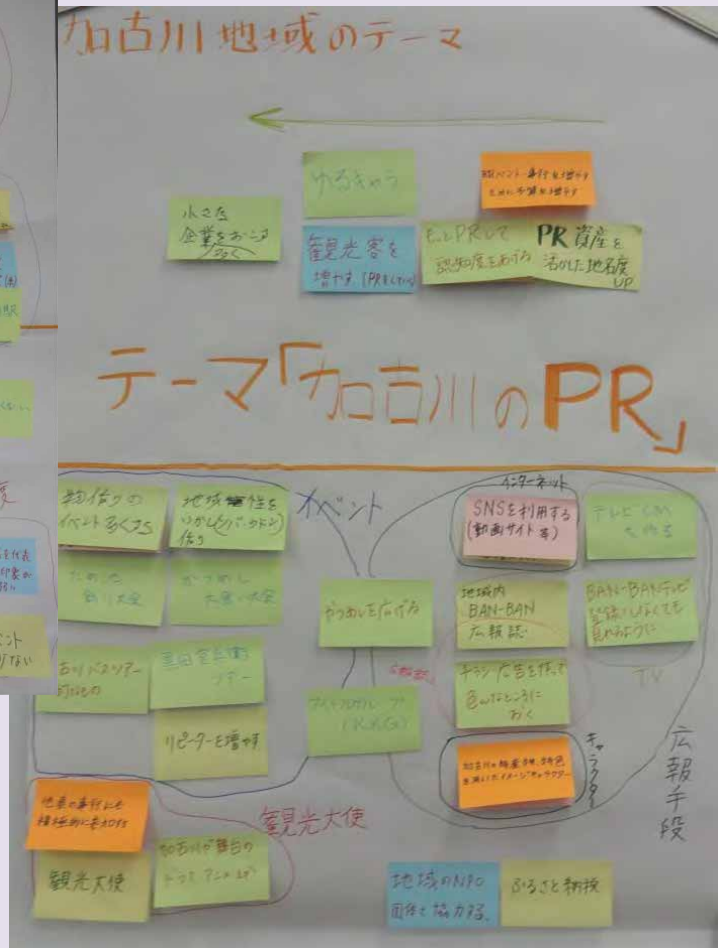
加古川地域の「強み」は、若者(兵庫大学がある等)、自然(山や川があり、気候が安定している等)、生活(必要なものが手に入る等)、人間性(人が優しい等)、知名度(歴史的遺産、かつめし等)、交通(新快速が止まる等)であった。一方、「弱み」は、経済(雇用が少ない等)、設備(娯楽が少ない等)、交通(南北への移動が不便等)、自然(大雨の後には河川にゴミがたまる等)、知名度(観光資源が少ない等)であった。

後半は、「自然」「人間性」「経済・地名度」にテーマを絞り、地域の活性化について検討した。自然を活用して経済を活性化し、人間性を高めることが有効ではないかという結論に達した。それを実現するため、川の周辺でのマラソンや地元の農産物を使ったグルメなどのイベント、日岡神社やフルーツパークなどの資源の活用、ゆるキャラなどを使ったPRなどが提案された。

グループK



前半



後半

【解説】

加古川地域の「強み」は、地理(山、自然、気候等)、PR(ツーデーマーチ、大河ドラマ等)、交通(都市部へのアクセスの良さ等)にまとめられた。その他の意見として、生活圏として充実していることや、細い路地を1本入ると雰囲気の良い飲食店が多いことが挙げられた。一方、「弱み」は、少子高齢化(神社祭礼に参加する若者の減少)、田舎(就職できる企業が少ない等)、認知度(目玉イベントが少ない等)にまとめられた。その他の意見としては、治安が悪い、地元の就職先が少ないなどが挙げられた。

後半は、弱みを補うための活動、取り組みを話しあう中で、「小さな企業を増やす→特産物が増える→多くの人に地域を知ってもらえる→住民を増やすことができる→地域が活性化する」という過程を確認した。そのための具体策として、広報の見直し(地域のPR広告を全国に配布、SNSの活用、ゆるキャラの活用等)、観光大使の選出・活用、イベントの活性化(他市と協力してタイアップ、大河ドラマのゆかりの地への観光ツアー、かつめし大食い大会)、などを提案した。

2. 議論の成果

議論の前半の主な意見をまとめると、加古川地域の強みと弱みについて表のようになる【表 4-2-1】。まず強みとして、「自然が豊か」「生活のしやすさ(利便性が高く、気候が穏やか)」「歴史・伝統がある」「名物がある(かつめしなど)」などが挙げられた。次に弱みとしては、「産業が少ない」「娯楽施設が少ない」「高齢化している」「治安が良くない」「交通マナーが悪い」「地域への愛着心が低い」「知名度が低い」などが挙げられた。また、強みとも弱みとも言える項目も抽出された。「交通」については、鉄道を中心とした利便性が挙げられる一方で、南北方向は移動しづらいという意見が見られた。「イベント」は様々催され活況であると評価される一方で、不十分であるとするグループもあった。「地域のつながり」はグループによって「ある」と「なし」に分かれており、加古川地域内で参加者が深く関わる場所と関係する可能性がある。

強み	弱み	両面
<ul style="list-style-type: none"> ・自然が豊か ・生活のしやすさ 利便性が高い 気候が穏やか ・歴史・伝統がある ・名物がある かつめしなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・産業や娯楽が少ない ・娯楽施設が少ない ・高齢化している ・治安が良くない ・交通マナーが悪い ・地域への愛着心が低い ・知名度が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通 鉄道の利便性が高い 南北の移動が不便 ・イベント 様々な催しがある 目玉イベントが少ない ・地域のつながり グループで異なる

表 4-2-1 加古川地域の強みと弱み

これらの地域の強みと弱みの解析を踏まえて、さらに掘り下げられた議論の後半では、主に訴えかける相手によって、大きく2つの系統を見ることができる。一つ目は、加古川地域に住む人が住みやすく楽しい町にしたいというものである。イ(イベント)・食・住という分類が提起され、その観点から加古川地域をより良い町にしていこうという議論は、その典型である。また、地域への愛着心を高めたり、地域の交流を促したりするべきだといった意見もあった。二つ目は、加古川地域の外にいる人たちにどのように加古川地域をPRしていくかというものである。前半の議論で多くのグループによって加古川地域の知名度は低いと指摘された。それを受けてPRの方策としてイベント、ゆるキャラ、歴史的遺産などの活用が提案された。

ただし、議論の2つの系統は独立したものではない。1つ目の系統の加古川地域の暮らしについて中心に議論したグループでも、2つ目の系統の外から目を意識した意見も出されており、逆もまた同様である。これら2つの系統は、つながりをもって捉えられるべきであろう。すなわち、住んでいる人たち

がより良いと思う町に変えながら、外に適切に情報を発信し、新たに住人を受け入れる。そして、さらに良い町にして発信する。そのような“循環型”地方都市の加古川地域を目指すことが、本熟議での議論全体から浮かび上がってくる一つの結論のように思われる。

本年度の熟議は三年計画の最初であり、まずは加古川地域の現状と課題について我々自身を知るといった意味が大きい。議論の中から加古川地域の強みと弱みを知り、今後進むべき道筋について、いくらかの明かりを灯すことができた。特に後半の議論で見られた2つの系統とそれらの循環は、次回以降の熟議の足がかりとなるものであろう。

(北島律之)